

章魚木の下で

中島敦

青空文庫

南洋群島の土人の間で仕事をしていた間は、内地の新聞も雑誌も一切目にしなかった。

文学などというものも殆ど忘れていたらしい。その中に戦争になった。文学に就いて考えることは益々無くなつて行つた。数ヶ月してから東京へ出て来た。氣候ばかりでなく、周囲の空氣が一度に違つたので、大いに面喰つた。本屋の店頭に堆うずたか高く積まれた書物共を見て私は實際仰天した。久しぶりで文学作品を読むと流石さすがに面白くはあつたが、南洋呆ぼけして粗雑になつた私の頭には、稍々やや微妙に過ぎ難解に感じられることが無いではなかつた。この事は作品以外の批評や感想などに至つて更に其の度を増した。文壇の事情に就いての予備知識が全然欠けていること、当然知つていなければならぬ幾つかの術語や合言葉を知らないこと、私が心理的にも論理的にも余りに大ザツパな単純な人間になり過ぎて了つたこと、之等これらがその原因のようである。併しかし、とにかくにも其等の文章を通じて、文学をする者にとつての現在の問題というものが臃おぼろげながら判つては来た。思えば自分は今迄章魚木たこのきの下で、時局と文学とに就いて全く何とノンビリした考え方しかしていなかつたことかと我ながら驚いた。ノンビリした考えどころではない、てんで何も考えなかつたのだ。戦争は戦争、文学は文学。全然別のもものと思ひ込んでいたのだ。己に課せられた実務が目

下の所第一の急務で、他は顧みる暇がない。稀に暇があつた時にのみ些かは文字を連ねることもあつたが、必ずしも文学作品という意識を以てではない。書くものの中に時局的色彩を盛ろうと考えたこともなく、まして、文学などというものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考えもしなかつた。少くとも応用科学が戦争に役立つと同じ意味で文学が戦争に役立ち得るとは愚かにも思い及ばなかつたので、此の際文学は忘れ去つて唯当面の仕事を一心にやつていればいいのだと簡単に考えた。国民の一人として忠実に生きて行く中に、もし自分が文学者なら其の中に何か作品が自然に出来るだろう。しかし出来なくとも一向差支えない。一人の人間が作家になろうとなるまいと、そんな事は此の際大した問題ではない。其の程度のボンヤリした考えで東京へ出て来たものだから、種々な微妙複雑な問題の氾濫にすっかり吃驚びつくりしたのである。成程なるほど、文学も戦争に役立ち得るのかと其の時始めて気が付いたのだから、随分迂闊うかつな話だ。しかし、文学者の学問や知識による文化啓蒙運動が役に立ったり、文学者の古典解説や報道文作製術が役に立ったりするのは、これ之は文学の効用といつて良いものかどうか。文学が其の効用を発揮するとすれば、それは、斯ういう時世に兎ともすれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性——或いは、氣負ひ立った外面の下に隠された思考忌避性といったようなものへの、一種の防腐剤としてであ

ろうかと思われるが、之もまだハッキリ言い切る勇氣はない。現在我々の味わいつつある感動が直ぐに其の儘作品の上に現れることを期待するのも些いささか性急に過ぎるように思われる。自己の作物の時局性の薄いことを憂えて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑おかしい。感動はあつても未だ文学的なものに迄醺酔しないし、古い題材では矢張何かしつくりせず、其の他種々の事情から現在が書きにくい時期だということは判る。だから、書けなければ書けないで、何も無理をして書かなくともいいのではないか。（ここで私は再び南洋での元の考え方に戻つて来る。）作家という名前は返上して、戦時下の国民の一人として戦争遂行に必要な実務にたずさわればいいのではないか。文学者の戦場は飽く迄書齋にあると唱える人が多い。現在も尚旺盛な創作熱にとり憑つかれてゐる人や、大いに自己の文学を以て御奉公し得る自信のある作家なら、充分にそれを主張する資格がある。併し、全然書けなくなったり、自己の作品に不安を感じたりするような人迄が、今迄文学をやつて来たからというそれだけの事実に引きずられて、無理に書齋に囁ささりつゝいてゐることは無い。人手の足りない此の際、宜しく筆を捨てて何等かの實際的な仕事に就いた方が、文学の為にも国家の為にもなろうと思ふのである。（實際は既に作家達は各々斯こうした仕事に就いてゐるのであつて、私がそれを知らないだけかも知れない。それだったら何も言

うことは無い。―斯ういう粗い^{あら}考え方は余りに文学を見縊^{みくび}つたように見えるだろうか。私自身としては毛頭そんなつもりは無い。却^{かえ}つて文学を高い所に置いているが故に、此の世に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。食料や衣服と違って代用品はいらない。出来なければ出来ないで、ほんものの出来る迄待つほかは無いと思う。だから、つい斯んなものの言い方になるのである。

章魚木^{たこのき}の島で暮していた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別していたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願い」と、「文学をポスター的実用に供したくない気持」とが頑固に素朴に対立していたからである。章魚木の島から華の都へと出て来ても、此の傾向は容易に改まりそうもない。まだ南洋呆けがさめないのかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「中島敦全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年5月24日第1刷発行

初出：「新創作」

1943（昭和18）年新年号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：小池健太

校正：小林繁雄

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

章魚木の下で

中島敦

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>